ディアパソン
DIAPASON

アステラは楽器と同じような鳴り方をするように工夫しています

10月上旬に開催されたハイエンドショウトウキョウ2012の会期に合わせて、イタリアからディアパソン・ブランドを擁するサウンドセンター社のチーフエンジニア兼CEOのアレッサンドロ・スキアービ氏が来日。日本への本格的導入が始まる代表モデル『アステラ』について伺った。

黛　今回、ハイエンドショウの会場でディアパソンのアステラを拝見しました。会場の音響条件がけっして望ましいものではないので、後日、ステレオサウンドの試聴室でじっくり聴かせていただく予定でいます。それにしても、エンクロージュアの凝った造りと、仕上げの丁寧さには驚きました。

スキアービ　お褒めいただきありがとうございます。アステラの直接の前身にあたるのはアダマンテスというモデルですが、これは89年に発表し、たいへん話題になりました。アステラはこのモデルをもとに細部に改良を施し、09年にモナコのオーディオショウでデビューさせたのです。より正確に言えば、アダマンテスとアステラは開発コンセプトこそ共通ですが、エンクロージュアのシェイプなどはより洗練されたものになっています。

黛　さまざまな形状の無垢材が複雑に組み合されていますが、このようなエンクロージュアの構造や製法は、どのような発想から生まれたのですか？

スキアービ　われわれにはイタリア家具の伝統があります。そのようなバックグラウンドがなければ、ディアパソンのスピーカーは生まれなかったでしょう。スピーカーは熟練したクラフトマンの手によって、工芸品のように丹念に組み上げられ、仕上げられています。イタリアンファッションのように、個性的でありながらもライフスタイルの中に破綻なく、そして心地よく溶けこむデザインであることも、ディアパソンの重要なエッセンスなのです。

アステラのエンクロージュアは、選びぬかれた良質な無垢材のみを使用し、すべて手作りで産み出されています。伝統の工法に現代のアイデアをプラスして、高い剛性を保ちつつ不要な共振を排除するように組み立てられているのです。ディアパソンの新製品プロジェクトは、まず音響再生のための革新的な技法と、エレガントで洗練されたエクステリアの融合を図るところから始まります。さらにアステラは、楽器と同じような鳴り方をするように工夫をこらしています。

黛　スキアービさん自身、楽器の製作に携わっていたのですか？

スキアービ　弊社のあるブレシアはヴァイオリン工房なども多く、音楽の街として知られていますが、友人にヴァイオリンの製作者がいるんです。彼から楽器の製法などを学び、スピーカー造りに応用しています。

黛　楽器造りのバックグラウンドがあるから、アステラのようなスピーカーが誕生したのですか？

スキアービ　たしかにそのような一面はあります。私自身、楽器の製作に興味があり、いろいろと勉強もしてきました。そうして知識や経験を蓄積していくと「これはスピーカーに応用できるな」と閃くことが多々あったのです。

もちろんスタジオエンジニアの経験もありますし、スピーカーメーカーで働いたこともありますから、楽器的なものとオーディオテクノロジーを融合することで、私の理想とするスピーカーを実現したかったのです。

アレッサンドロ・スキアービ氏
Mr.Alessandro Schiavi